

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-179	16-077	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)		
Social Desirability Bias in the Reporting of Alcohol Consumption: A Randomized Trial. 飲酒量調査における社会的望ましきバイアスについて：無作為化比較試験		
執筆者		
Kypril K, Wilson A, Attia J, Sheeran P, Miller P, McCambridge J.		
掲載誌		
J Stud Alcohol Drugs. 2016 May;77(3):526-31.		
キーワード		PMID
飲酒量、ネット調査、バイアス、大学生		27172587
要 旨		
目的： 回答にバイアスを生じさせるような質問を作成し、飲酒量の調査に影響を与えるか検討した。		
方法： オーストラリアのある公立大学で対象者を無作為に 2 群に割り付ける調査を実施した。ネット上の"Research Project on Student Health Behavior"というサイトから募集の電子メールを学生に送信した。参加者は身体活動、食事、喫煙を含む 9 項目の質問に回答した。対象者は知らされることなくランダムに次の A か B の 2 群に割り付けられた。A：飲酒に関する 3 項目の質問を行った。B：アルコール依存・問題飲酒に関する 7 項目の質問（回答画面に"問題飲酒者同定テスト"と明示）を行い、次に A と同じ 3 項目の質問を行った。		
結果 3,594 名名の学生（平均年齢 27 歳、標準偏差 10 歳）が回答し、A へ 1,778 名、B へ 1,816 名がランダムに割り付けられた。評価項目は飲酒した日数、飲酒日の典型的なドリンク数（1 ドリンク＝アルコール換算およそ 10 グラム）、6 ドリンク以上飲酒した日数とした。4 週間以内に飲酒があったもの（A:1,304 名、B:1,340 名）の割合について両側 t 検定を行った。A、B それぞれ、飲酒した平均（±標準偏差）日数 5.89 ±5.92, 6.06 ±6.12, p=0.49、飲酒日のドリンク数 4.02 ±3.87, 3.82 ±3.76, p=0.17、6 ドリンク以上飲んだ日数 1.69 ±2.94, 1.67 ±3.25, p=0.56 であった。		
結論： 先に回答したアルコール依存の質問がその次の飲酒量に関する質問に影響を与えず、本研究では帰無仮説を棄却できなかった。本研究は、大学生を対象にしたネット上の飲酒量調査の妥当性を支持する。		